

第Ⅰ章 序 章

この報告は平城京左京三条二坊六坪における1975年度の第96次調査、1977年度の第109次調査、1979年度の第121次調査の3次にわたる発掘調査と、1982年度～1984年度の整備に伴う調査をとりまとめたものである。第96次調査については1975年度に奈良国立文化財研究所が、第109次・121次調査については1979年度に奈良市教育委員会がそれぞれ発掘調査概報を刊行しているが、その後の調査により、導水路の解釈や、園池造成時期などに新しい知見が加わっているので、既刊の概報を一部訂正しつつ報告する。

1 平城京の調査

平城京の調査研究は、幕末の北浦定政にはじまる。定政は実地を踏査し、史料を収集して
* 1852(嘉永2)年に「平城宮大内裏跡坪割之図」を作製した。明治以降、関野貞をはじめ多くの研究者によって、平城宮・平城京の研究はさらに発展し、平城宮跡は特別史跡に指定されてその大部分が国有化され、発掘調査と保存整備が継続的に進められている。

平城京に関する発掘調査では、1954年に旧奈良県立高等学校敷地内で掘立柱建物群が検出されたのが最初で、1969年度には、国道24号線バイパス計画の路線変更にともない、東三坊大路、左京一条三坊十五・十六坪において調査が行われた。同年に羅城門の遺構も確認された。
* その後、京の発掘調査件数は次第に増加し、条坊や坪内の宅地利用状況などが次第に判明している。1979年には奈良市教育委員会事務局に文化財室が新設され1981年には文化財課、さらに1984年に文化課となり、奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会とともに京の調査に当り、左京二条二坊十二坪、同五条二坊十四坪、同五条一坊一坪、外京五条五坊七坪をはじめ各所で
* 重要な成果をあげている。

平城京右京の南部は大和郡山市に所属するが、同市教育委員会事務局社会教育課も京の調査を実施するようになり、奈良大学・帝塚山大学の協力もあって、調査件数は次第に増加しているが、そのほとんどは開発に伴う事前調査であり、とくに近年は京内の全域に開発がひろがり、現状では開発の進行に十分の対応ができず、今後に課せられた問題が多い。
* 京の調査成果は奈良国立文化財研究所の学報・年報・概報、奈良県遺跡調査報告、奈良市埋蔵文化財調査報告書や各個別の概報などで逐次報告されており、条坊関係では朱雀大路・大路・条坊間路・小路の各方位・尺度・幅員・構造などが次第に明らかとなり、東堀川と堀川の機能を持った広い水路や橋も確認されている。

京は寺院や京職、市などの公的施設もかなりの面積を占め、今回報告した左京三条二坊六坪
* をはじめ、同五条一坊一坪なども建物配置の状況から何らかの公的施設と考えられるが、大部分は宅地にあてられていた。宮の近くでは1坪あるいはそれ以上の広い占地の宅地が多く、八条、九条や外京の南辺では小規模の宅地割が確認されている。平城京の宅地割は古記録からも坪の16分の1が基準と考えられるが、左京八条三坊九坪ではじめて発掘調査によって確認さ

れ、さらに1985年度の左京九条三坊十坪、右京八条一坊十四坪では16分の1坪をさらに東西に2分した32分の1の宅地割が確認された。東市・西市でも一部の調査が行われている。藤原仲麻呂の田村第推定地に含まれる左京四条二坊十五坪では礎石建物も発見されているが、宅地内の建物はほとんどすべて掘立柱である。大規模の宅地の主屋では桁行9間に達するものもあり、

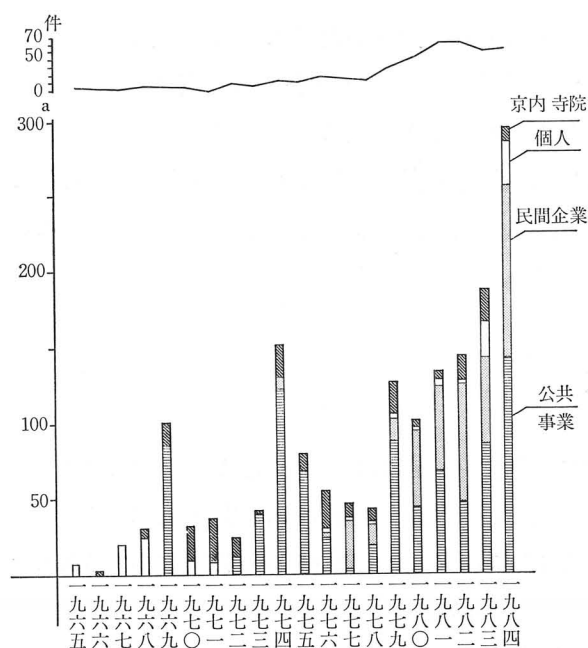


Fig. 1 平城京発掘調査件数・調査面積

多数の建物を整然と配置する。 * 小規模宅地では桁行3間、梁間2間、各間2m程度の小規模な建物2~3棟で構成され、大部分の宅地が各個に井戸を持つ。和同銭鑄造の跡や漆・金属関係工房跡と考えられる遺 * 跡もあり、下層から古墳時代の遺跡が検出されることもある。出土遺物には日常什器を中心とする多数の土器、京特有の瓦をはじめ、墨挺・銭貨などを土器に納めた胞衣壺、地鎮 * 具や人面墨書土器、土馬、人形・刀形、斎串・銅鏡などの祭祀関係の遺物もあって多様性に富んでいる。

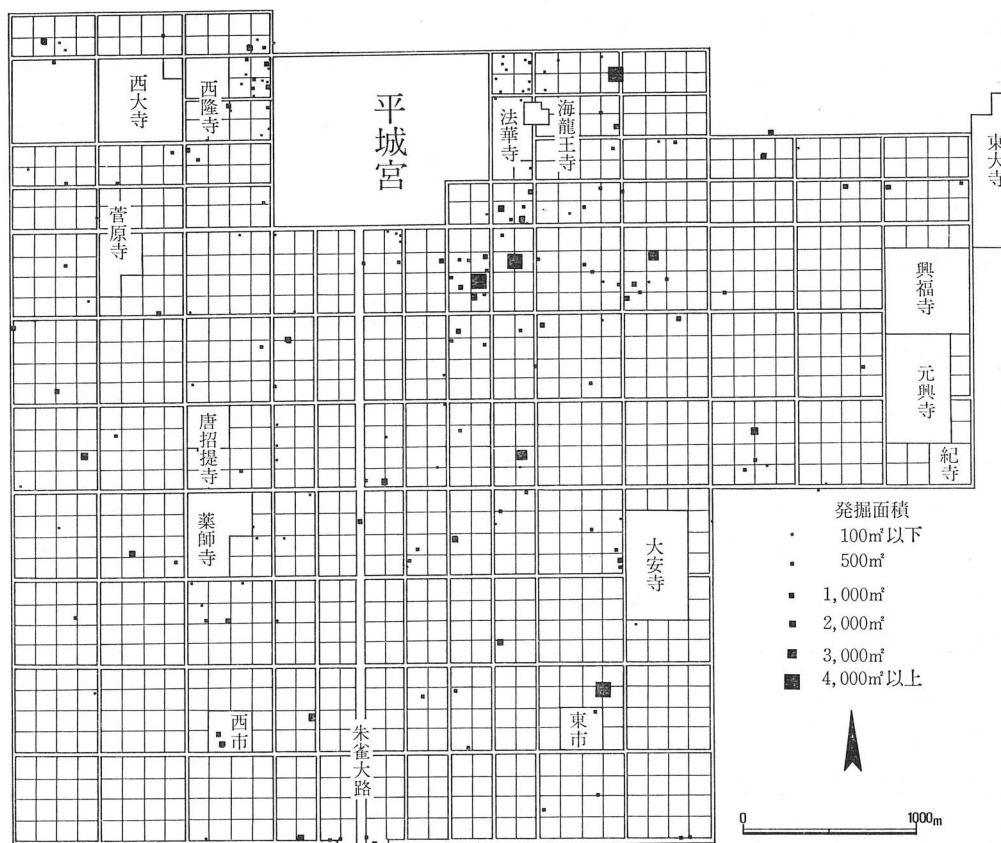


Fig. 2 平城京発掘調査位置図

2 報告書の作成

今回報告する調査は1975年度の第96次調査、1977年度の第109次調査、1980年度の第121次調査、1982年～1984年度の整備に伴う発掘調査の報告である。以下発掘責任者と発掘担当者、発掘調査関係者を列記する。

* 次 数	発掘年度	所 長	部 長	発掘調査担当者				
第96次	1975	小川 修三	鈴木 嘉吉	田中 哲雄	牛川 喜幸	狩野 久	森 郁夫	
					横田 拓実	宮本長二郎	佐藤 興治	
					吉田 恵二	山本 忠尚	岡本 東三	
					綾村 宏	須藤 隆	毛利光俊彦	
					松本 修自			
* 第109次	1977	坪井 清足	狩野 久	安田龍太郎	森 郁夫	宮本長二郎	吉田 恵二	
					綾村 宏	安田龍太郎	中村 友博	
					本中 真			
第121次	1979	坪井 清足	狩野 久	光谷 拓実	鬼頭 清明	山本 忠尚	中村 雅治	
*			岡田 英男		巽 淳一郎	上原 真人		

1982～1984年度の整備に伴う調査では、田中哲雄、本中 真が、また木樋・木梓の取り上げに際しては奈良市教育委員会 中井 公が参加した。

報告書の作成は1984年度から開始し、遺構関係の整理については遺構調査室・計測修景調査室があたり、遺物については考古第一調査室・考古第二調査室・考古第三調査室・史料調査室が分担し、1984年度以降、執筆分担者を中心として検討会を行い原稿を作成した。執筆分担はつぎのとおりである。

第Ⅰ章	1 岡田 英男	2 田中 哲雄			
第Ⅱ章	田中 哲雄				
第Ⅲ章	1 田中 哲雄	2 松本 修自・田中 哲雄			
* 第Ⅳ章	1 綾村 宏	2 杉山 洋	3 千田 剛道	4・5 岩永 省三	6 粉川 昭平
第Ⅴ章	1 田中 哲雄	2 綾村 宏	3 光谷 拓実	4 田中 哲雄	
第Ⅵ章	田中 哲雄				
英文要旨	松本 修自				

第Ⅳ章一6の植物遺体の鑑定は大阪市立大学教授 粉川昭平氏に、（花粉分析は神戸市立教育研究所 前田保夫氏）第Ⅲ章一2の岩石鑑定は同助手 松岡数充氏（現長崎大学助教授）にそれぞれ依頼し、成果を得たものである。

遺構・遺物の写真撮影は八幡扶桑、佃 幹雄が行ったが、植物遺体は一部粉川昭平氏撮影による。木質遺物の樹種鑑定は光谷拓実が行い、編集は岡田英男の指導のもとに田中哲雄が担当した。

* 図面浄書はそれぞれ執筆者が分担し、諸富万理子・角谷邦子・中菌まゆみ・辻本香織・細井智津子の助力があった。